

伊藤 整
日本文壇史

明治末期
の文壇
18

講談社

日本文壇史 XVIII

© 伊藤貞子 一九七三

昭和四十八年一月二十四日 第一刷發行
昭和四十八年五月二十四日 第二刷發行

定價八二〇圓

著者 伊藤 整

發行者 東京都文京區音羽二・二二二 野間 省 一

印刷者 長野市西和田四七〇 長澤 良 一

印刷所 長野市西和田四七〇 信毎書籍印刷株式會社

(黒柳製本)

發行所 東京都文京區音羽二・二二二 株式會社 講談社

振替口座 東京三九三〇
電話 (945) 一一一一(大代表)
郵便番號 一一二

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan

0391-135782-2253 (0) (文1)

すめと藤村

讀者に

瀬沼茂樹

參考文獻

索引

「日本文壇史」全十八卷 總目次

裝幀構成岡本芳雄

寫眞

*

與謝野寛 「解之葉」 「愚者の死」(「スバル」掲載) 「食堂」(「三田文學」掲載)

石川啄木 啄木の日記 節子 土岐哀果 宮崎郁雨とふき子

*

久保田万太郎 「朝顔」(「三田文學」掲載) 永井荷風 阿部草藏

高濱虚子 河東碧梧桐 「三千里」 「續三千里」 松根東洋城 大須賀乙字 荻原井泉水

*

佐藤春夫 「習作第一」 堀口大學 堀口九萬一とスチナ・ジュテルンド

吉井勇 「酒ほがひ」とその口繪 「水莊記」

*

徳田秋聲、はまと子供たち 「微」第六十八回 「微」

伊藤左千夫 三井甲之 長塚節 「土」原稿 節の生家

*

森田草平 田村俊子 「あきらめ」 尾島紫子

島崎藤村 冬子 「家」のモデルと目される人々 「家」 藤村と鶏二、楠雄

寫眞提供 東京都近代文學博物館 日本近代文學館

目次

第一章

明治四十四年、與謝野寛の詩「彗星」——永井荷風の場合——反自然主義系文學者の會同——鷗外と志賀直哉の考へ——蘆花の演説「謀叛論」——與謝野寛の詩「誠之助の死」——佐藤春夫の詩「愚者の死」

第二章

啄木の思想變る——「樹木と果實」——啄木の新しい詩——啄木と
森田草平——啄木の一家が病む

六

第三章

俳句少年久保田万太郎——河東碧梧桐と高濱虚子の對立——碧梧桐
と新傾向俳句——暮雨の俳句との別れ

四

第四章

「三田文學」と學生たち——久保田万太郎世に出る——小宮豊隆と

七

中村星湖の論争

第五章

堀口大學と佐藤春夫の生活——大學の外遊——大學がホノルルで病
む——吉井勇の家系——勇と劇作

八四

第六章

徳田秋聲の生活——秋聲が「足跡」を書く——秋聲が「微」を書く
——秋聲の文名あがる

一〇六

第七章

伊藤左千夫の小説——長塚節の小説——「土」の執筆——「土」の
評判と完結

一七

第八章

漱石の「門」——田村松魚と田村俊子の結婚生活——俊子の「あき
らめ」——尾島菊子のこと

一八

第九章

島崎冬子の死——三人の文士——「家」の出版と反響——再婚のす

一九

「日本文壇史」全十八卷

總目次

第一卷 開化期の人々

- 第一章** 明治三年、假名垣魯文が「西洋膝栗毛」を書く——福澤諭吉の地位とその仕事——魯文が「安愚樂鍋」を書く——魯文が作家をやめて役人になる——江戸戯作者の生活——魯文の經歷
- 第二章** 明治六年、民選議院論——明六雜誌——西周と森林太郎——開成學校と英語學校——中江兆民——坪内勇藏の少年時代——成島柳北の「柳橋新誌」と服部撫松の「東京新繁昌記」——「東京日日」と「朝野新聞」——福地櫻痴と岸田吟香——「讀賣新聞」の成立
- 第三章** 明治八年、新聞紙條例と讒謗律による言論彈壓——明六雜誌の廢刊——津田仙と中村正直——幸田露伴の少年時代——高島藍泉と前田香雪——饗庭篁村——「平假名繪入新聞」と「假名讀新聞」——柳北と鐵腸が投獄される——「東京新誌」創刊
- 第四章** 明治九年、クラークと札幌農學校——坪内逍遙と開成學校——加藤弘之の「眞政大意」——魯文と弟子たち——落語家圓朝——徳富蘇峰と新島襄
- 第五章** 明治九年、神風連の亂、西南戰爭と徳富蘆花の幼年時代——新聞記者犬養毅——天下第一の記者福地櫻痴——「東京新誌」——「花月新誌」——「團々珍聞」——「魯文珍報」——銀座街に聳える各新聞社
- 第六章** 明治九年、クラークが札幌を去る——新渡戸稻造と内村鑑三——魯文と「假名讀新聞」——新富座と團十郎と默阿彌——珍猫百覽會——紅葉と美妙と二葉亭の幼時——青年廣津柳浪——高橋お傳——「朝日新聞」の出發——逍遙落第す——「花柳春話」
- 第七章** 明治十四年、銀座が完成する——西園寺公望と「東洋自由新聞」——藤村の上京——花袋が本屋の小僧となる——十四年政變と國會開設の勅諭——「時事新報」の發刊——自由黨と改進黨の成立——「新體詩抄」出る——板垣退助の遭難——女辯士岸田俊子——「自由新聞」の發刊——兆民と蘇峰——板垣とユ

ウゴウ——福島事件

第八章 明治十五年、中島信行と岸田俊子——坂崎紫瀾、宮崎夢柳、櫻田百衛の政治小説——「經國美

談」が出る——中江兆民の「民約譯解」と加藤弘之の自著減版廣告——植木枝盛と馬場辰猪の加藤攻撃——

逍遙の文學開眼——東京専門學校の創立——透谷が入學する

第九章 明治十七年、逍遙が「ジュリアス・シイザ」を譯す——「自由燈」發刊——鷗外がドイツに留

學する——加波山事件と秩父騒動——自由黨と改進黨の崩壊——宮崎夢柳の「鬼啾々」——成島柳北の死

——服部撫松の文學活動終る

第十章 明治十八年、「當生書生氣質」の刊行——漱石と子規の學生時代——硯友社の出發——徳富蘇峰

の評論が世の注目を引く——田口卯吉と木村鐙子——「文學雜誌」の創刊——明治女學校と巖本善治——魯

文と綠雨——逍遙と綠雨の交はり——「小説神髓」が出る——幸田露伴と長谷川二葉亭の無名時代——大阪

事件と北村透谷

第二卷 新文學の創始者たち

第一章 明治十九年、逍遙と二葉亭と矢崎嵯峨の屋——長谷川如是閑の少年時代——「新體詞選」の出版

と山田美妙の新文體——巖谷漣と江見水蔭と大町芳衛——長谷川二葉亭が「浮雲」を書く——批評家石橋忍

月

第二章 明治二十年——二十一年、田口卯吉と徳富蘇峰——「國民之友」創刊——「浮雲」第二篇が出る

——田邊花圃の「藪の鷺」——三宅雪嶺と「日本人」の創刊——美妙の「夏木立」——「我樂多文庫」が公

賣になる——美妙が硯友社から離れる——「文學會」の發生——「都の花」創刊

第三章 明治二十年——二十一年、北海道から上京した露伴——日本譯聖書——淡島寒月と西鶴の發掘

——露伴の「露園々」——逍遙が小説に絶望する——森田思軒——美妙の「蝴蝶」——新雜誌が續々と出る

——「佳人之奇遇」——廣津柳浪の出現——保安條例と中島湘煙——明治學院の成立

第四章 明治二十二年、紅葉が「二人比丘尼色懺悔」を書いて文壇に登場する——「新著百種」のこと

——紅葉と魯庵——憲法發布——透谷が結婚し「楚囚之詩」を書く——「孝女白菊の歌」——石橋忍月の

「色懺悔」評——漱石と子規——徳富蘆花が上京する——十九歳の花袋——堺利彦が一高を退學する——二

葉亭が「浮雲」第三篇を書いて後、文學に絶望し、官報局員となる

第五章 明治二十二年、前年ドイツから歸つた鷗外が結婚し、文學仲間と譯詩集「於母影」を作る——そ

の影響を受けた中西梅花、松岡國男、島崎藤村等——露伴が「風流佛」を書く——口語體が衰へる——鷗外

が「柵草紙」を發刊する——柳浪が「殘菊」を書く——魯庵と二葉亭

第六章 明治二十二年末、饗庭篁村が「讀賣」を退く——明治二十三年、新聞「日本」の發刊——「東京

朝日」の發刊——齋藤綠雨と半井桃水——綠雨の戯文「小説八宗」——紅葉が「讀賣」に入る——矢崎蟬峨

の屋と巖谷小波——鷗外が「舞姫」を書く——鷗外と忍月の論争——中西梅花の狂癖——硯友社の文士劇

——「國民新聞」の發刊——假名垣魯文が隱退する——紅葉の父

第七章 明治二十三年、露伴の「縁外縁」が發表される——矢野龍溪の「浮城物語」と森田思軒——硯友

社系の新作家、渡邊乙羽、中村花瘦、堀紫山、北村三亞等——紅葉館——山田美妙と女性——鷗外と内田魯

庵——宮崎湖處子の「歸省」——原抱一庵の出現——紅葉と露伴が「讀賣」で競作をする——酒井雄三郎と

中江兆民と堺利彦——巖本善治と若松賤子

第八章 明治二十三年、齋藤綠雨の戯文——露伴の「一口劍」が出る——鷗外の「うたかたの記」——鷗

外が離婚する——中西梅花の「東藻の姫」——美妙の「日本韻文論」——忍月と美妙の論争——明治二十三

年の文士雅號一覽——第一回國會——新聞「國會」と綠雨——ラフカディオ・ハーンが松江中學の教師にな

る——内村鑑三の勸語事件——再び鷗外と忍月の論争——中西梅花の狂行

第九章 明治二十四年、紅葉が牛込の横寺町に移る——岩野泡鳴が東北學院に入る——樋口一葉が小説に

志す——一葉と半井桃水——金澤における徳田秋聲と泉鏡花——西田幾多郎が退學する——徳田秋聲と桐生

悠々が上京する——國木田獨歩が植村正久に洗禮を受ける——花袋が紅葉を訪ふ——北村透谷の「薔菜曲」が出る——緑雨の「かくれんぼ」と「油地獄」——原抱一庵の「閨中政治家」——紅葉が結婚する——泉鏡花が紅葉の書生となる——徳田秋聲が紅葉にはねつけられる

第三卷 悩める若人の群

第一章 明治二十四年、「早稲田文學」の創刊と没理想論争——山田美妙と田澤稻舟の戀愛——小杉天外が齋藤緑雨の弟子になる——正岡子規の小説「月の都」を露伴は推薦せず——露伴の「五重塔」とその反響——若き日の禿木と敏——樋口一葉が師の半井桃水を戀す——北村透谷が山路愛山と知り合ひ、「厭世詩家と女性」を書く

第二章 明治二十五年、藤村が明治女學校の教師になり、透谷と知る——巖本善治の性格と若松賤子——星野天知と藤村——紅葉が「三人妻」を書く——小栗風葉の出現——高田早苗が暴漢に斬られる——田中正造の怒號演説——一葉が半井桃水と一先づ別れる

第三章 明治二十五年、國木田獨歩の二度目の上京——内田不知庵と二葉亭の交際——二葉亭の苦惱——湖處子と透谷——蘆花の仕事の始め——鷗外の「水沫集」——正宗白鳥の少年時代——子規と漱石と虚子——「女學雜誌」の變化——藤村の戀愛——中嶋湘煙がイタリアへ行く——一葉「うもれ木」を發表する——三宅雪嶺と田邊花圃の結婚——一葉が桃水を誤解する——花袋世に出る

第四章 明治二十五年、紅葉の「夏小袖」——「罪と罰」の日本譯——透谷の小説とその思想——藤村が戀愛より逃避す——「文學界」創刊——硯友社文學の變貌——花袋の文壇登場が紅葉にはばれる——子規が「日本」に入社す——黒岩周六と探偵小説——默阿彌死す——淺香社の成立——愛山と透谷論争す

第五章 明治二十六年、破滅型作家原抱一庵の生活——郡司大尉と露伴——一葉と禿木——硯友社と根岸派の作家生活——泉鏡花の初登場——醫學博士森林太郎の戦ひ——藤村が漂泊の旅から歸る——透谷の精神

的危機——藤村が破滅に瀕す——野口米次郎の渡米——湖處子詩集の出現

第六章 明治二十六年、北村透谷と齋藤冬子——佐々城信子の家族——透谷自殺を企てて失敗する——國木田獨歩は自由社員となる——獨歩は大分縣の教師となる——正岡子規が「小日本」の主筆となる——高濱虛子が三高を退學上京する——島崎藤村は佐藤輔子と別れる——北村透谷が自殺する

第七章 明治二十七年、高山樗牛の「瀧口入道」が現はれる——樗牛と上田敏と大町桂月の學生時代——上田敏と田口卯吉——匿名の書「文學者となる法」——文壇確立す——鏡花發奮す——蘆花結婚す——日清戰爭はじまる——獨歩が「國民新聞」記者となる

第八章 明治二十六年、一葉が龍泉寺町に店を開く——一葉は生活に目標を失ひ、奇怪な行爲をする——村上浪六と塚原澁柿園——一葉と「文學界」の人々——一葉借金に苦しみ、本郷丸山福山町に移轉する——藤村の兄が入獄する——佐藤輔子が結婚する——獨歩が從軍する

第九章 明治二十七年、虛子と碧梧桐が三高を退學して上京する——泡鳴が上京して福地櫻痴に逢ひ、歌舞伎作者たらんとする——假名垣魯文死す——綠雨「國會」を退き「二六新報」に入る——上田萬年、綠雨、天外と與謝野寛——軍艦千代田における獨歩——森鷗外出征す

第十章 明治二十八年、「帝國文學」の創刊——批評家高山樗牛と上田敏——大橋乙羽が博文館に入る——「太陽」と「文藝俱樂部」と「少年世界」の創刊——山田美妙が妾のことで非難される——美妙と逍遙——一葉の「大つごもり」と「たけくらべ」——川上眉山と廣津柳浪が新生面を開く——鏡花の「夜行巡查」が出る

第十一章 明治二十八年、高濱虛子と河東碧梧桐の親交——子規從軍に出發す——藤野古白自殺す——漱石の戀愛事件——漱石が東京を逃げ出して松山へ行く——獨歩が内村鑑三の書物を読む——獨歩と女性——徳富蘇峰と深井英五の從軍——子規が船中で咯血する

第四卷 硯友社と一葉の時代

第一章

明治二十八年、徳田秋聲が志を得ず大阪、金澤、長岡に放浪生活をした後に上京して博文館に入る——秋聲と田岡嶺雲の交はり——秋聲が紅葉の弟子になる——鏡花の「外科室」が評判になる——露伴の大作「風流微塵藏」——露伴の結婚——水蔭と花袋と幸徳秋水

第二章

明治二十八年、一葉が次第に世間に認められる——一葉は桃水の私行を疑つて苦惱する——獨歩が佐々城信子を知る——田澤稻舟の處女作が出る——中西梅花の狂氣が直る——子規と漱石が同居し、漱石が句作を始める——獨歩と信子の戀愛が始まる——獨歩と信子が鹽原に行く——獨歩が開拓を志して北海道に行く

第三章

明治二十八年、藤村の戀人佐藤輔子が死ぬ——藤村が苦惱して、再び明治女學校をやめる——獨歩が佐々城信子と結婚する——逍遙が「桐一葉」を完成する——一葉の家に集まる眉山、孤蝶、秋骨、敏たち——緑雨と後藤宙外——紅葉と風葉——女流作家大塚楠緒子、小金井喜美子、北田薄氷たち——美妙が稻舟と結婚する

第四章

明治二十八年、樋口一葉の盛名——田山花袋と「文學界」の同人たち——川上眉山と齋藤緑雨と一葉——二十九年、湖廬子が硯友社を攻撃する——明治女學校焼失と若松賤子の死——末廣鐵腸の死——服部撫松が落魄して仙臺中學の教師となる——信子が獨歩のもとから失踪する——漱石の見合ひ——子規と廬子——子規カリエスとなる——漱石熊本五高の教授になる——「たけくらべ」に對する鷗外と露伴の評——一葉が胸を侵される

第五章

明治二十九年、山田美妙と田澤稻舟の結婚生活が破綻する——江見水蔭が片瀨に住む——鷗外の父靜男が死ぬ——幸田露伴時代の出現——一葉と緑雨——「新小説」の復刊——「新聲」の創刊——夏目漱石が結婚する——ラフカディオ・ハーンが歸化して小泉八雲となる——柳浪の「今戸心中」が現はれる

第六章

明治二十九年、與謝野鐵幹の詩集「東西南北」が出る——鐵幹と子規の交友——鐵幹と朝鮮の政